医学部の品格

北海道大学大学院医学研究科　瀬谷　司

北海道大学医学部に入り基礎医学を学んでもう４０年になろうとしている。当時の基礎医学講座の内情など知る由もないが、諮らずも基礎医学を教える立場になって独法化後の現在と比較すると、昔は良くも悪くも暖かい時代だったと思えてならない。過去は何が違うのか基礎教官の立場から考えてみる。1. 大学研究の自由度が保証されており、大学の「格」があった。2. 実用化研究、橋渡し研究などのプレッシャーが無かった。3. 講義・実習など学生とのふれあいが厚かった。4. 医学部学生がそこそこ基礎講座へ入局した。5. 臨床の大学院生が学位研究のためによく参加していた。6. 論文は高質のジャーナルを要求されなかった。7. 教官は今よりかなりデューティ面で暇であった。8. そのせいか一部の基礎の教授は政治とゴルフが好きで遊んでいた。9. その結果かフェアな人事が行われず無能なトップを頂いた講座は内部崩壊しやすかった。

以上思いつくまま書いても良い懐旧とともに明らかに「問題」もあったと思う。ただし、当時は「同じ釜の」仲間という意識が「問題」を笑い流せるゆとりともなっていたように思う。今、世知辛い研究世界の潮流のさなかにいて、そのようなゆとりをもつ余裕は無い。世相の変化が医学部の甘さを放っておかず、緩和な人間関係の醸成を許さない環境に変えた，と言えなくもない。研究を生涯続けるには克己心と真摯性が要る。そういう覚悟はあってよいが、医学とはヒトを知る学際領域であり、ヒューマニティも要求される。相容れない双極性の中で長い人生を柔軟に対応し、だらけずに講座を主宰することも重要であったろう。高い能力の人材がゆとりと見識をもって生きて行く自由度が大学に幅を持たせていた、とも云えそうである。

2003年から新臨床研修制度が始まり、すぐに大学は独法化した。新卒医師はそれまで殆ど出身大学医学部で研修をしていたが、それからは任意の医療機関で研修をするようになった。大学の医局制度は荒廃し、現在基礎の講座に医学生は殆ど来ない。新研修制度に付帯する問題点は玉突き現象である。1. まず、大学医局のスタッフが減少するため、ジッツ病院に医師の派遣が出来なくなる。地方は特に医療過疎が進む。2. 医局のバックアップが無いと産婦人科、小児科、脳外科などきつそうな診療科は敬遠される。3. 大学医局に研修医が戻らず大学院が定員割れする。4. 臨床講座の大学院から基礎に来る学生が減少する。5. 学生を基礎に勧誘する訳に行かなくなる。6. 大学医学部の研究レベルが低下し、益々医師の大学離れが進む。7. 人材難と研究力の低下で研究費がとれず基礎講座は深刻な経営難となる。これらの具体例は、医療過疎、離島の医療現場、産婦人科医師の不足などで社会問題化しているが、大学で潜在化している深刻な問題は20年後の基礎講座である。医学部出身者のいない基礎講座で誰が医学生を教育し、どのように責任体制を築くのか？現場を知らない官僚の無責任さには辟易するが、それに揺れる大学であって欲しくない。

どんな状況でも教育の場を維持することは重要である。大学の品格とは大型研究費を獲得したり高質の研究論文を輩出することだけにあるのではなく、真理に謙虚で人間の暖かみを失わない「研究者」を培うことにこそある、と私は信じたい。大学改革のありようは表向きの医師数増やしでなく、その原点を逸失しないことである。

（瀬谷　司、プラタナス、日本医事新報 4578: 3, 2012. より。）